

介護を受けるということ②

前回から始まったのは、判断力は十分ですが身体の状態が悪い夫と、認知症の症状が現われはじめ家事ができなくなってきている妻という、80歳代夫婦のお話です。遠方に住む子供たちが、両親の介護保険の認定申請を手配しようとしたところ、この夫婦は逆上してしまい、介護保険による訪問ヘルパーの介入は断固拒否されてしまいました。



なぜ、この夫婦は介護保険の利用を頑なに拒んだのでしょうか。その要因は2つあると考えられます。

1つめは、この夫婦にはそもそも自宅に他人を招き入れる習慣がなく、居室の掃除が行き届かず衛生状態が悪くなっている中に他人が入ってくることに對して、プライドが許さないという感情が働いていると思われる。

2つめは、介護保険についてその本質を理解することなく、イメージだけで介護保険を捉えていたからです。つまり、特に夫婦の意思決定をリードしている夫は、介護保険というのは家族に世話してもらえない人が使うもので、自分たちには立派に育てたはずの2人の子供がいるのだから、子供たちが両親である自分たちの世話をすべきだと考えてしまったことです。

1つめの「自宅に他人が入ってくるのを嫌がる」という方は、近年、特に都心部において数多くいらっしゃいます。私が子供の頃、田舎の集落では鍵もかけていない家が多く、近所の住民が「ごめんください」と言いながら、ガラガラと玄関の引き戸を開けて入ってきて、土間で話し込んだりしていたものです。

現在は、防犯上、自宅のセキュリティ対策もどんどん厳重になってくる中で、他人を気楽に家に招き入れる習慣はどんどん薄れてきています。せっかく介護保険制度の中で、訪問による介護や看護が受けられるにもかかわらず、そもそも自宅に他人を入れたくないという気持ちが強いと、在宅介護の第一歩が踏み出せないのです。

2つめの「介護はそもそも子供たちがやるべき」という考え方は、介護というものに対する根本的な理解不足です。特に、子供たちが現役世代で仕事をして家計を支えている場合、親の介護で仕事から離れるようなことになれば、経済的に共倒れにもなりかねません。また、介護のために退職をした人に対するその後のアンケート調査によれば、退職をして介護に集中できる環境になっても、親子の関係や精神状態は決して良くなってはいないのです。親と子の絆を保つためにも、介護そのものについては、介護保険という経済的に有利な制度を利用しながらプロに仕事として依頼することが望ましいのではないのでしょうか。それ以外にも、子供たちが家族として求められる役割はたくさんあります。

今回は、この夫婦のその後についてお話しします。